

## 追悼のこゝとば

法文学部の新校舎が今年春完成し、法学科の教官は充実して、私どもの悲願であった法学科はささやかながら清々しい運  
行をはじめている。しかし、私にはこのしあわせな場に羽田先生がいないことの不合理性がどうにもやりきれない。羽田  
先生は法学科生みの親であったといっても過言でないからだ。思えば羽田先生の本学における足跡は偉大であった。賢人  
会に関する博士論文を中心とする研究活動には生涯変わらぬ真摯な努力と情熱を傾けて倦まなかっただけでなく、また、  
法学科の責任者として、終始毅然としてあらゆる困難に立ち向かいこれを克服して今日の法学科の礎を築きあげる力働と  
風格を併せ具えていた。羽田先生が常日頃豪語していた「私は負けたことがない」という言葉が重い実感となって胸に迫  
るのである。それなのに、いよいよこれからという時を迎えながら、いつしか恐るべき病魔が羽田先生の背後にしのびよ  
っていたとは誰が想像し得たであろう。「おい、萩さん、よかったな」、今日のような小春日和に、長い間私たちがそう  
であったように向かいあった机の向うから、そういう声が聞こえてくる光景を想う。引きしまった顔面に浮かぶ心からな  
る喜びの表情が見たかった。しかし、私がこの世で現実に見た最後の羽田先生は、不治の病に襲われながら、回復を信  
じ、法学科の前途に対する希望に縋って、じっと病苦を堪えしのぶ殉教者のような姿であった。

羽田先生、私どもは先生の播いて下さった種子は私どもの力の限りをつくして育てあげてみせます、と声を大にして申  
しあげる。それしか、先生の痛恨の情を慰める道はないと思うからです。

先生が逝かれてから一年、ここに先生に捧げる論文が揃いました。まち見て下さい。

昭和四十三年秋

新校舎六階の研究室で

萩 大 輔